

氏 名：堀 部 光 宏

学 位 の 種 類：博士 (看護学)

報 告 番 号：甲第103号

学 位 記 番 号：博第101号

学位授与年月日：令和4年3月17日

学位授与の要件：学位規則第4条第1項該当

論 文 題 目：消化器がん術後の後期高齢者への退院後の日常生活を見据えた看護実践

Nursing Practice Foreseeing Everyday Life After Discharge

for Postoperative Elderly Aged 75 and Over with Digestive Cancer

論 文 審 査 員：主査 江 本 リ ナ

副査 坂 口 千 鶴 (正研究指導教員)

副査 三 浦 英 恵 (副研究指導教員)

副査 吉 田 みつ子

副査 西 田 朋 子

## 論文審査の結果の要旨

現在、高齢者の増加に伴いがんの罹患者も増え、特に後期高齢者においては消化器がんに罹患する者の増加が著しい現状がある。手術等における安全の向上から、75歳以上の後期高齢者においても手術が治療の第一選択となっている。しかし、諸機能の低下、肺炎やせん妄など術後合併症による入院期間の延長や退院後の食事や排泄等の変化は、日常生活を一変させるため、急性期病院の決められた入院期間の中で、いかに退院後の日常生活を見据えたケアができるかは、高齢社会の進展の中で重要なテーマであると評価された。

本研究は、東京都内の2つの急性期病院において、消化器外科系病棟の看護師19名と後期高齢者2名への参加観察法とインフォーマルインタビュー、Covid-19の流行後は、フォーマルインタビューを中心にデータ収集が行われた。研究者と研究参加者の双方の主観性や価値を理解し、解釈しながら看護実践を記述していく Charmaz による社会構成主義グラウンデッドセオリー法を用いて分析し、8つのカテゴリーと23のサブカテゴリーが明らかになった。消化器がん術後の後期高齢者への退院後の日常生活を見据えた看護実践は、消化器がんの切除によって生じた身体的変化とその日常生活への影響を踏まえて、新たな変化を組み込みながら、経時的に変化する関わりが特徴的であった。手術による侵襲や既往などの影響を医学モデルから考慮しつつ、後期高齢者に特徴的な身体・精神・認知機能の低下など、複雑に様々な要因が絡み合う中で、退院後の日常生活と高齢者の主体性も常に意識しながら、総合的に判断し、継続的・連続的なケアとして記述された。すなわち、研究参加者である看護師は後期高齢者に対する一般的な知識、認識、イメージがある中で、後期高齢者のこれまでの日常生活をもとに、高齢者ができていた部分は継続して維持し、手術による食事や排泄等への変化はその生活に組み込むことで、新たな退院後の日常生活を高齢者やその家族とともに創り出そうとする過程が具体的に描かれていた。

これまで地域包括ケア、つまり在宅と急性期という2つの極をもつシステムとして考え、それをいかにつなぐかという視点で議論されることは多かったが、本研究結果では、急性期医療モデルの中に日常生活モデルを取り込みながらケアしている実状と看護師の実践が思考や判断とともに詳細に示されている点が、この研究の新規性であると評価された。

審査の結果、本論文は本学の審査基準を満たしていると判断し、博士(看護学)の学位論文として「合格」と判定した。